

令和3年度小中学校教育研究会視聴覚教育部会研究報告

1. 郡市名 米原市

2. 研究主題

教育メディアが拓く、豊かな感性、そして確かな学びと生きる力へ

～湖国からの発信～「学び」「心」そして「響き」へ

3. 研究活動の組織・体制

部 会 長		理 事		研究推進委員	
中村 徳稔 (伊吹小)		坂田 将至 (大原小)		坂田 将至 (大原小)	
一ノ宮 賢了 (米原中)		高木 健 (大東中)		高木 健 (大東中)	
各校代表者	学校名	氏名 (学年)	学校名	氏名 (学年)	
	柏原小学校	宮本 慶季	息長小学校	藤田 泰史	
	山東小学校	佐々木 数馬	柏原中学校	河下 倫子	
	伊吹小学校	豊島 司	伊吹山中学校	椿井 湧	
	春照小学校	水野 拓	米原中学校	大山 秀幸	
	米原小学校	成川 正道	河南中学校	田辺 裕	
	河南小学校	西島 昭司	双葉中学校	小菅 和可菜	
	坂田小学校	清水 宏樹			

4. 本年度活動計画

	概 要
5月26日	・研究活動計画の組織・体制・主題の決定 (紙面にて)
11月25日	・第70回 近畿放送教育研究大会 滋賀大会 ・第71回 近畿学校視聴覚教育研究大会 滋賀大会
その他	・視聴覚・情報機器を活用した授業の実践 (各校) ・研究のまとめ

5. 研究の進め方

- ・コンピュータやタブレット端末、電子黒板等の教育メディアを有効に活用した授業改善を行う。
- ・放送教材、ビデオ教材を活用した学習のあり方を研究する。
- ・メディアリテラシーや情報モラル育成のために学習のあり方を研究する。
- ・様々な教育メディアが有効利用される教育環境のあり方を研究する。

6. 研究の重点課題について

- ・教育メディアの効果的な活用を追求する。
- ・テレビ放送やデジタルコンテンツの活用を通し、情報活用能力を高める学習を追求する。
- ・高度なネット社会の主体者に相応しいメディアリテラシーや情報モラル育成の授業のあり方を

追求する。

- ・様々な教育メディアが、誰にも I（いつでも）C（ちょっとした気持ちで）T（使える）になるような教育環境を追求する。

7. 取り組みについて

米原市でも、昨年度より 1 人 1 台タブレット端末が導入され、これまでの教育実践に加えて、I C T 機器を有効活用した学習活動の一層の充実を図ることが求められている。こうした点を踏まえ、ICT 機器を有効に活用しながら、児童たちが情報を主体的に捉えながら、何が重要かを考え、見出した情報を他者と協働し、新たな価値の創造に挑んでいけるようにするため、情報活用能力の育成を目指している。その中で、学ぶことの楽しさや意義、子ども同士のつながりの大切さを実感できるようにさせ、主体的に学ぶ子の育成を目指して進めている。

今回は本校で取り組んできた実践例を挙げたい。

米原市立大原小学校での取り組み

● I C T 機器を活用した授業改善

（1）授業づくり・・・授業力の向上

- ・各学年・ふたば学級において、研究授業を実施し全教師が参観する。
（事前授業は、相学級の教師が研究授業の 1 週間前くらいに行い、学年部、管理職、研究主任が参観し、事後研究会を行う。）
- ・授業検証を行う。

（2）研修会・・・指導力の向上

- ・校内研修の実施や、校外研修（市・県）への参加により、指導力アップを図る。
- ・授業研究会では、授業分析を行い、講師を招聘し指導・助言を仰ぐ。
- ・先進地の実践に学び、学びの共有を図る。

(3) 研究の実際、成果と課題

(1) ふたばは組 自立活動 単元名「あつまれ おおはらの森」

1. 本時の目標 友だちの発表を聞き、図鑑の工夫や良さを伝えることができる。

2. 本時の展開

学習活動	* 主な発問 ・児童の反応 ◎教師の支援	評価規準
1. ドリルパークをする。	◎ドリルパークをして学習のスタートを意識させる。	・友だちの発表を聞き、図鑑の工夫や良さを伝えようとしているか。
2. めあてを確認する。	◎前時までの学習を想起し、ポイントを振り返る。	
友だちのアイテムの良さを発表し、アイテムをゲットしよう。		
3. アイテム交換をする。 ・アイテムの紹介をする。 ・聞き手はアイテムの良かったところを伝える。 ・もらったアイテムをアレンジする	・6年A児は紹介する時に緊張して最後まで話ができないことが予想される。自分の言葉でアイテム紹介ができるよう声かけをする。 ・6年B児は、紹介する時に文を読むだけで終始してしまわないように、工夫した点が伝えられるよう声かけをする。 ・5年C児本人の口から友だちの工夫や良さを伝えてもらいたいが、言葉が出てこない場合は、ボードにある話型を指し示す。 ・6年D児はもらったカードをアレンジする際にどのようにすればいいか迷うことが予想されるので、友だちの良さがどこにあったのか確認しながら進める。 ・3年E児は、この学習は初めてなので、簡単な流れを説明し、安心して授業に参加できるよう声かけをする。 ◎アレンジしたところや工夫したことを紹介し、がんばって取り組めたことを認め、次時への意欲につなげる。	
4. アレンジしたアイテムを交流する。		

《成果》

○情報の共有

- ・オクリンクを活用し、子どもたち同士がお互いの調べたことを送りあい、図鑑をよりよいものへとしていた。
- ・友だちの図鑑の良さに気づき、伝え合うことが自然とできる学習の場を設定されていた。

○達成感

- ・クオリティの高い図鑑を作成できたことで、子どもたちの達成感が大きかった。自分の図鑑に自信をもって発表していた。

(2) 第1学年 生活科 単元名「たのしい あき いっぱい」

1. 本時の目標 おもちゃの改善点を見つけ、協力して改良することができる。
2. 本時の展開

学習内容	指導上の留意点(○) 予想される反応(・)	評価基準(評価方法)
1. 前時の活動内容と本時のめあてを確認する。	・2年生からのアドバイスをふり返り、前時に撮影したおもちゃの写真を見ながら、改善点を確認する。 ○1時間の学習の流れを提示し、見通しをもって活動できるように促す。	
	もっと楽しくなるようにあきのおもちゃランドをパワーアップさせよう。	
2. 各グループに分かれ、活動を続ける。	・前時の続きで、事前に決めておいたパワーアップするところを各グループに分かれて作り直す。 ・時間が来たら、パワーアップしたおもちゃの写真を「お手伝い先生」に撮ってもらう。 ○早く終わったグループには、次の活動内容を伝える。	友だちと協力して、おもちゃがよくなるよう作ろうとしている。
3. 全体で交流する。	・児童のタブレット画面をテレビに映し。共有する。 ・2枚の写真を比較して、パワーアップしたところを電子黒板で書き込みながら発表し合う。	

《成果》

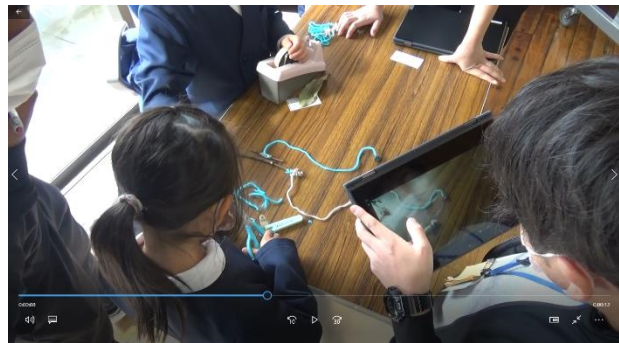
○視点の明確化

- ・おもちゃのパワーアップ前後の写真を比較することで、どこをパワーアップしたのがよく分かった。
- ・電子黒板に写真を映し、ペン機能を活用して子どもたちが発表していた。注目してほしいポイントがよくわかった。
- ・子どもたちが画面に注目していた。



○機器の扱い

- ・1年生でも、起動→ログイン→カメラの起動と、スムーズに行っていた。使い慣れていた。
- ・ログインパスワードの入力のために、キーボードに小さなシールを貼る工夫をされていた。慣れるまでシールでの支援を行い、慣れたらはがすとのことで、とてもわかりやすい工夫だと思った。



《課題》

▲機器の扱い

- ・低学年にはこのタブレット PC は重すぎる。写真撮影を自分で行うことができず、教員が操作していた。
- ・重たいために落として故障してしまう心配もある。

▲人員

- ・本時は補助教員が二名。一人でこの授業を行うとなると、厳しいものがある。(写真の撮影、不具合発生時の対応、比較の準備、電子黒板との接続など)

(3) 第6学年 道徳科 単元名「団地と子犬」

1. 本時の目標

規則は、そのことに関わる人々が幸せに生活できるようにという願いを込めて作ったものであることを理解し、その一員として自覚と責任を持ち、進んで守ろうとする態度を養う。

2. 本時の展開

学習内容	指導上の留意点(○) 予想される反応(・)	評価基準(評価方法)
1. 課題意識を持つ。	○学校にはどんな規則(ルール)があるか確認する。 ・廊下を走ってはいけない。 ・授業中立ち歩いてはいけない。 ・シャーペンを持ってきてはいけない。 ○規則を変えることについて、自分の考えを出す。 ○大勢の人に関わる規則を変えることについて、賛成か反対か。	

2. 学習課題を確認する。	よりよいきまりとはどういうものだろうか	
3. 『団地と子犬』の範読を聞き、自分の考えを持ち、話し合う。	○なぜ、団地では動物を飼ってはいけないという規則があるのか。 ・部屋が傷つく。 ・苦手な人も住んでいる。 ○子どもたちはどんな気持ちで規則を変えてもらおうとお願いに行ったのだろうか。	
4. 規則について、自分の考えをまとめる。	【主発問】 <u>○団地の規則を変えることについて、賛成・反対どちらの立場か。</u>	
5. 教材の結末を聞き、規則について考える。	○この教材の結末についてどう感じたか。	
6. 学習のまとめ	○規則は全体のことを考えて作られており、個人の要望では変えられず、関わる人の納得が必要であることを伝える。	◆道徳ノート記入 《評価》 本時を学習して、自分なりのふり返りが書けているか。
7. 教師の説話	賛成が多い→反対の立場の話 反対が多い→賛成の立場の話	

《成果》

○時間の短縮

- ・資料配付の時間が不要で、その分学びの時間に回せていた。
- ・全員の考えを一目で確認することができた。

○意見の共有・比較

- ・班の人と自分の考えを見せ合うだけでなく、遠く離れた席の人の考えを見ることができた。
- ・赤と青の2色で、揺れ動く感情を表現し、伝えることができていた。考えの見える化。
- ・机間指導をしなくとも、意図的指名を行える。
- ・自分の意見がすぐに反映されるため、発表の苦手な児童も自分の考えを伝えられた気持ちになっていた。



○機器の扱い

- ・メーターの操作、タイピングなど、子どもたちは慣れた手つきで行っていた。日頃から ICT 機器を活用している様子が伝わってきた。
- ・タブレット PC を使わないタイミングでは、画面を前に向けるなど、切り替えもうまく行えていた。



《課題》

▲時間

- ・板書との並行が時間的に厳しい。また、黒板にも多くの情報、タブレットにも多くの情報となると、子どもは見るべき場所がわからなくなるおそれがある。

▲考えが正しく伝わらない

- ・メーターの様子だけでは伝えられない思ひは、やはり言葉で伝える必要がある。ICT 機器の活用には重きを置くあまり、話す力の育成を忘れてしまっているといけない。

▲操作スキル

- ・タイピング能力の差が大きい。理由を入力する際に、思いを出し切れない児童がいたため、紙に書く活動も大事にしたい。
- ・大きく差がつかないように、低学年のうちからタブレットを活用していく必要性を感じた。

▲タブレットを使用することで起こる弊害

- ・文字が小さいため、目をこらす児童や、画面に顔を近づける児童がいた。視力の低下が心配である。
- ・姿勢が悪くなってしまう児童が多かった。1 日の中でタブレット機器を使用する時間が多くなればなるほど、体に与える影響が心配である。

8. おわりに

今年度の取り組みによって、職員の ICT 機器の活用に対しての意識が変わった。これまで、苦手で困っているという声を多く聞いてきたが、現在はすべての職員が ICT 機器の活用に対して意欲を持って取り組んでいる。そのため、授業研究会でもさまざまな成果と課題を見つけることができた。

また、ICT 機器の活用が、楽しく分かりやすい授業につながるとすべての職員が実感している。どの場面でもどのように ICT 機器を活用することが効果的であったか、様々な事例を共有していくことで、全職員のスキルアップを図っていきたい。

○都市名 野洲市

○研究テーマ

多様なメディアと「ふれあい」「あそびあい」「創りあえる」子どもを育てよう
～児童・生徒のあゆみに寄り添って、多様なメディアを通して対話しあえる授業の実現をめざそう～

○研究組織

部会長	幹事(運営委員)	研究推進委員
平野 達也(野洲小)	檜垣 拓志(野洲小)	柴田 翔平(北野小)
研究委員		
川端 悠平(中主小) 加藤 一男(篠原小) 関川 法之(祇王小) 岩見 一樹(三上小)		

○年間の研究報告

1学期	・研究活動予計画の組織・体制・主題の決定 ・視聴覚・情報機器を活用した授業の実践(各校)及び情報交流
2学期	・視聴覚・情報機器を活用した授業の実践(各校)及び情報交流
3学期	・視聴覚・情報機器を活用した授業の実践(各校) ・研究のまとめ

○実践事例

北野たんけんたい～北野のすてきを見つけよう～
(野洲市立北野小学校3年生のタブレット型端末を利用した実践)

1. 実践のねらい

- (1) 校区のよさを追求することで地域への愛着を深めるとともに、進んで地域とかかわって
いこうとする。
- (2) 情報を収集したり整理・分析したりする活動を通して、自分たちの校区のよさに気付く。
- (3) 学習したことを相手や目的に応じて適切に伝える。

2. 実践の方法・流れ

校区の探検を通して見つけた「北野のすてき」について、大地図やミニ劇、ペープサートやクイズ、紙芝居にしてまとめていった。それを、本校の隣町にある中主小学校の同学年の児童に向け発表し、自分たちの校区の良さを知ってもらおう、という相手意識や目的意識を持って発信できるように取り組んでいった。

児童用タブレットについては、今年度5月に、各教室の高速無線LANの整備とともにその利用環境が整ったばかりである。本学習においては、Teamsを利用して中主小学校とオンラインで結び、調べたことの発表を交流し合った。そして、発表に向けての取り組みの中で、児童用タブレットの撮影機能や動画再生機能を利用して、よりよい発表を児童たちの手で作り上げていった。

〈学習の流れ〉全27時間

第一次

①これまでの経験をもとに「北野のすてき」を出し合う。

第二次

②～⑨ 北野小学校から4方向に探検し、気付いたことをまとめる。

第三次

⑩「北野のすてき」を中主小学校の友だちにどのように伝えるか考える。

⑪～⑰「北野のすてき」大地図を作成する。

⑱～⑳グループごとの発表準備をする。

㉑～㉔グループの発表を見合い、意見交流、発表の改善を行う。

㉕ リハーサルを行い、意見交流、発表の微修正を行う。

第四次

㉖㉗ 中主小学校との発表の交流、振り返り

3. 実践の結果・考察

他校の友だちに向けて自分たちの校区のよさを知ってもらおうという相手意識や目的意識を持ち続けながら、校区探検から発表まで取り組むことで、主体的に学習を進めていくことができた。また、自分たちで発表の内容や方法についてどんどん工夫していくことができた。ICT活用によって、遠隔地とオンラインでつながる、撮影・動画再生機能を利用して客観的に自分の姿を見つめる、といったことが学習の中で可能となったことが大きい。

4. 今後に向けて

他校児童とのやり取り以外にも、地域の施設や他県市町の工場などともオンラインでつながり、双方向のやり取りを通して相手意識や目的意識を持って学びを深めていきたい。また、撮影・動画再生機能を利用して自己を形成的に評価していく活動も取り入れていきたい。

令和3年度 滋賀県小中学校教育研究会 視聴覚部会研究報告

(1) 郡市名 草津市

(2) 研究テーマ

「ICTを活用して、学ぶ意欲と豊かな表現力 生きる力を育成しよう」

(3) 研究組織

1. 今年度の組織について

【部会別研修会】 部会長 角 玲子 (草二小)、副部会長 好士崎 壯 (草二小)

【県小・中学校教育研究会】

	部会長	小学校部会長	中学校部会長	研究委員長
視聴覚教育部	角 玲子 (草二小)	角 玲子 (草二小)	太田 洋司 (玉川中)	好士崎 壯 (草二小)

学校名	氏名	学校名	氏名
高穂中学校	中西一雄 片山史啓	玉川中学校	引地顕秀
草津中学校	竹若佑亮	新堂中学校	山元卓
老上中学校	津留崎駿	松原中学校	日比悠人
志津小学校	尾副智基 荻野祐浩	老上西小学校	松本友香
志津南小学校	倉田里奈 石橋朋晃	玉川小学校	矢部静香
草津小学校	関口徹 富田雅人	南笠東小学校	磯谷輝
草津第二小学校	藤井大輔 金延登太	山田小学校	瀧弘人
渋川小学校	中川広紀	笠縫小学校	吉野歩実 渡邊真郎 林孝治
矢倉小学校	松浦慧	笠縫東小学校	山下冬馬 中田裕貴
老上小学校	中井善久	常盤小学校	北村淳

○運営委員等について (輪番)

県視聴覚部会 運営委員	市ICT部会 研究委員 (授業提供)
草津小学校 (関口徹先生)	志津南小学校 (倉田里奈先生)
玉川中学校 (引地顕秀先生)	新堂中学校 (山元卓先生)

(4) 年間の研究

教育情報化推進リーダー研修と兼ね、下記の3つのグループに分かれ研究を進める。

【共通研究内容】

- ①各校の「情報教育（ICT教育）全体計画」、「年間計画」の情報提供
- ②実践事例集の作成
- ③授業研究・研修
 - ◆1人1台配備されたタブレットPC等の有効な活用について

A オンライン授業・ミライシード・Microsoft Trams

- ・オンライン授業実施に向けた課題整理およびその解決に向けた取組について
- ・情報セキュリティ、情報モラル教育に関する情報収集および提案について
- ・Microsoft Trams、ミライシードの活用方法の研究および提案について

B NEW 草津型アクティブ・ラーニング

- ・NEW 草津型アクティブ・ラーニングの概要について
- ・NEW 草津型アクティブ・ラーニングの授業公開の実施
- ・ICTの有効活用記録

C 草津市プログラミングカリキュラム

- ・草津市プログラミングカリキュラムの確認
- ・草津市プログラミングカリキュラムの見直しおよび情報交換

	オンライン授業・ミライシード Microsoft Trams	NEW 草津型 アクティブ・ラーニング	草津市 プログラミングカリキュラム
第1回 4/13	計画、役割分担、情報交換	具体的な観点、収集したデータの 周知方法	草津市プログラミングカリキュラム の確認、R2 実施状況情報交換
第2回 5/25	オンライン授業の内容検討 各校の推進計画の情報交換	実践事例報告	プログラミングカリキュラム内容の 検討 各校の推進計画の情報交換
第3回 7/28	1学期の実施状況 校内研修等の情報交換 Microsoft Trams およびミライシード の活用方法について	実践事例報告	1学期の実施状況 カリキュラムの見直し 校内研修等の情報交換
第4回 8/31	2学期の計画 Microsoft Trams およびミライシード の活用方法について	研究授業内容報告	校内研修の推進と情報発信の方法 2学期の計画 公開授業の検討
第5回 11/9	授業研究	3グループ授業実践ビデオ報告	授業研究

第 6 回 12/23	情報セキュリティ 情報モラル教育の見直し 3 学期に向けた情報交換	Pepper 表彰・研修会	カリキュラムの見直し 3 学期に向けた情報交換
第 7 回 2/22	まとめ 次年度への引継ぎ	まとめ	モデルカリキュラムの見直し・まとめ 授業事例のまとめ

(5) 取り組み（実践事例）

草津市立草津小学校 4 年 社会科 授業者 教諭 関口 徹

1. 単元名 「ごみのしよりと活用」

2. 単元の目標

知識・技能	ごみを処理する事業は、衛生的な処理や資源の有効活用ができるよう協力して進められていることや、地域の人々の健康な生活環境の維持と向上に役立っていることが理解できたり、見学・調査したり、地図や各種資料で調べたりして、まとめることができる。
思考力・判断力・表現力等	ごみの処理の仕組みや再利用，県内外のごみの処理に携わる人々の苦労や工夫・協力に着目して，ごみの処理のための事業の様子をとらえ，その事業が果たす役割について，調べたことや考えたことを表現できる。
学びに向かう力・人間性等	ごみを処理する事業などについて，学習問題などの解決に向けて意欲的に追究する等とともに，これまでの学習をふり返り，地域社会の一員としての意識をもち，ごみの適切な処理や再利用に協力しようとしている。

3. 単元計画（全 12 時間）

	主な学習活動
1	・シンキングツールにまとめた「ごみ」をもとに、大まかにごみ処理の流れを矢印をつけて図にまとめる。
2	・草津市の最終処分場が後 6 年で満杯になる現状を踏まえて単元を通す学習問題を設定する。 ・ごみの減量についてあいまいなこと、もっと知りたいことをタブレット PC にまとめる。
3	・学習問題、調べたいこと、予想、調べ方の 4 点を考えて学習計画を立てる。
4	・ごみの処理やごみを減らすために、家、クリーンセンター、再生工場（資源）、最終処分場がどのような取り組みをしているのか、学習計画に基づいて必要なデータをタブレットに集める。
5	・学習計画に基づいて集めたデータをタブレット PC に整理する。

6	・ごみの処理やごみの減量のデータを整理するとともに、わかったこと、考えたこと、さらなる疑問をタブレット PC にまとめる。
7	・同じ学習問題を調べているメンバーで情報を持ち寄り、タブレット PC 上で1つのプレゼン資料を作成する。
8	・家のごみを中心にタブレットにまとめたグループが説明したことを基に、ごみの量、種類や分別を知り、人々の協力によってはじめてごみが減らせることを考える。
9	・クリーンセンターのことを中心にタブレットにまとめたグループが説明したことを基に、ごみの処理の流れや課題を知り、ごみを減らすことの大切さを考える。
10	・再生工場と最終処分場のことを中心にタブレットにまとめたグループが説明したことを基に、4Rの取組や人々の協力によってはじめてごみが減らせることを考える。
11	・京都市のごみが数年で半分になったことを知り、どんなごみに焦点を当て、どんな取り組みをしているのかを調べる。
12	・京都市の取組や今までの学習から、草津市のごみをさらに減らすにはどうしたらいいかを考え、自分が考えるごみ減量宣言にまとめる。

4. 本時のねらい（ 本時 7 / 1 2 ）

ごみの処理やごみの減量のデータを整理し、わかったこと、考えたことをまとめたプレゼン資料を作ることができる。

学習活動	指導上の留意点	評価
調べたことを整理してプレゼン資料にまとめよう		
<u>1. 集めた資料の中から2枚のデータを選ぶ。</u> ・3つのデータの中から2つのデータを選ぶ。	・1, 2の指示を行う。	
<u>2. データからわかったこと、考えたこと、疑問に思ったことをまとめる。</u> ・わかったことを考える 〇〇が分かりました ・考えたことをまとめる 〇〇だと思います ・さらなる疑問に思ったこと	・データは2まいとし、「わかったこと」「考えたこと」「疑問」をしっかりと書かせるように指導する。 ・文末表現を提示する。	集めたデータからわかったこと、考えたこと、疑問に思ったことをまとめることができる。

<u>3. 同じ内容を調べているチームでプレゼン資料になるようにまとめる。</u> ・どのデータを使うかを考える ・具体物を使って説明できるようにする ・さらなる疑問をまとめる 学習問題 データ (2～3枚) 考えたこと A 児 考えたこと B 児 考えたこと C 児 さらなる 疑問	・わかったこと、考えたことが書けている児童の書きぶりを紹介する。	
<u>4. データを保存する。</u> ・じぶん BOX に保存する。 日付 プレゼン	・プレゼン資料の先頭に日付のカードを作るように指示する。	

(6) 成果と今後の課題

- ・単元の学習が進むにつれて、個々にあるいは友達どうして学習問題を解決しようとあちこちで数人のグループを作り話し合いをする様子が見られた。また、わからないことはタブレット PC や本、パンフレット、インタビューなど様々な方策を駆使して調べていく姿が見られた。
- ・タブレット PC が手元にあり、いつでも活用できることから、わからないことや気になったことはその場ですぐに調べることができた。また、調べたことをモニターにミラーリングして、全体で共有することで学びを深めることができた。
- ・タブレット PC に保存したデータを取捨選択したり、並べ替えたりすることで、自分の考えを整理することができた。
- ・ICT があるから、話し合いが活発になるわけではない。ICT を活用できるスキルだけでなく、話し合いのスキルも高めておくことが必要である。また、安心して話し合いができる環境づくりも重要である。

令和3年度 長浜市教育研究会視聴覚部会 研究報告書

(1) 郡名 長浜市

(2) 研究テーマ 「教育メディアが拓く、豊かな感性、そして確かな学びと生きる力へ」
～ 湖国からの発信～「学び」「心」そして「響き」へ～

(3) 研究組織

副支部長 長浜市立神照小学校 教頭 高山 義雄
運営委員 長浜市立北郷里小学校 教諭 伊藤 淳
研究推進委員 長浜市立長浜北小学校 教諭 角田 敦 ・ 教諭 宮川 翔

各校視聴覚主任

校名	主任名	校名	主任名
長浜小学校	島内 佑祥	速水小学校	大川 雅人
長浜北小学校	宮川 翔	朝日小学校	林 洋希
神照小学校	布施 志郎	富永小学校	馬淵 大輔
南郷里小学校	千葉 隆志	高月小学校	田中 理歩
北郷里小学校	伊藤 淳	古保利小学校	竹ヶ鼻 涼音
長浜南小学校	嶋田 紀子	七郷小学校	中村 雅昭
湯田小学校	杉村 貞治	高時小学校	桂 悠貴
田根小学校	木野 望	木之本小学校	花田 侑美
浅井小学校	門内 徹	伊香具小学校	山崎 涼
びわ南小学校	田中 雅人	塩津小学校	高橋 和徳
びわ北小学校	高橋 優真	永原小学校	長谷川 要治
虎姫学園（前期）	西田 知朗	余呉小中学校（前）	
小谷小学校	大平 夏甫		

(4) 年間の研究（事業）報告

※ 本年度は、市内視聴覚教育主任会は実施せず。

6月1日（火）～ 各校での実践

(5) 取り組み（実践事例）

PowerPoint を活用した学習発表会 ～児童が安心して取り組める演劇発表会を目指して～
長浜市立長浜北小学校 特別支援学級の実践から

①長浜市特別支援学級 小・中合同学習発表会&作品展

- ・長浜市内の小中学校の特別支援学級の児童・生徒が、日頃の学習成果を発表する催し。
- ・旧長浜市内の小学校6校と中学校4校が、浅井文化ホールを会場に、ステージ発表を行う。

②学習発表会への取り組み

- ・演劇の形式で行われることが多い。本校でも数年来、演劇の形式をとっている。
- ・卒業する6年生を中心とする演劇を考えた。

③発表の会場

- ・1月下旬に保護者へ学習参観という形で発表。会場は本校のマルチスペース（多目的教室）。
- ・2月上旬の全校朝会で、全校児童に発表する。会場は本校体育館のステージ。
- ・2月中旬に旧長浜市内の小学校6校と中学校4校で本発表を行う。会場は浅井文化ホール。
それぞれのステージの広さや照明、雰囲気が全然違う。

④PowerPoint の活用

- ・こだわりがあり、急な変更を嫌がる児童がいた。
- ・その場に応じた臨機応変な対応を苦手とする児童がいた。
- ・ステージが変わったときに戸惑う児童が多かった。
- ・どのようなステージでも児童が練習と同様に安心して演劇ができるようにしたい。
PowerPoint を活用して背景やBGM、効果音が同じタイミングで入るようにする。

⑤PowerPoint を活用した演劇発表の準備

- ・夏休みまでに台本を作成し、夏休み中にシナリオと配役とセリフなどを各担任と確認する。
- ・夏休み中に PowerPoint で背景やBGM、効果音などを設定し、各担任と確認する。

⑥保護者の感想から

「学習発表会『オズの魔法使い』の素晴らしい演技に子どもの成長を感じました。しっかりとセリフも言えて演技もできて、この日のために毎日頑張ったんだねと思いました。」

「今年は4年生ということもあって出番の多い役柄でしたが、本人なりに大きな声で精いっぱい頑張っている様子が見られて、頼もしく感じられました。」

など、児童の演技のよさやこれまでの頑張りを称賛するものが多かった。

⑦研究の課題

- ・早い段階からシナリオやプレゼンテーションを作成しなくてはならない。
- ・練習のたびにパソコンやプロジェクターを運ばなくてはならない。

⑧研究の成果

- ・児童が混乱することなく練習し、安心して発表することができた。
- ・大道具などの作成や運搬、保管等の手間が省けた。
- ・背景やBGM、効果音を一人で操作でき、気になる児童に職員がつくことができた。

（6）成果と今後の課題

長浜市では、今年度からは、GIGA スクール構想に係り、2～6年生全員に、一人一台のモバイル端末が配備された。長浜市にとって、視聴覚に係る大きな変革の一年となった。モバイル端末の有効活用を進め、授業改革に臨みたい。そのためにも、指導者個々の指導力向上を図り、視聴覚主任が率先して技術や知識を学び、効果的な活用方法などの研修や講習会を行うこと。併せて、よりよい実践を交流する場の設定を検討する必要がある。

また、児童への情報モラルの指導の徹底を図ることも重要である。便利さの裏に潜む危険性についても十分に指導した上で、視聴覚教材を積極的、効果的に使っていける力をつけていきたい。

令和3年度 小学校視聴覚部会 研究報告

1 群市名 蒲生郡

2 研究テーマ 肢体不自由学級におけるタブレット活用による学習意欲向上

3 研究組織

支部長	日野町立南比都佐小学校	木村 政秀
研究推進委員	日野町立南比都佐小学校	上田 周平

4 年間事業計画

- 4月15日(木) 蒲生郡教科主任会
- 5月20日(木) 第1回支部長会
- 7月29日(木) アナウンス・ビデオ教室
- 11月25日(木) 近畿放送教育研究会 近畿学校視聴覚教育研究大会
- 2月 3日(木) 第2回支部長会

5 取り組み〈日野町立南比都佐小学校の実践例から〉

肢体不自由学級には、筆記用具を使って文字を書くことに身体的な課題があり、そのために学習意欲が低下する児童もいる。その中で、今年度から1人1台のタブレットが導入された。タブレットを活用したことで、児童が集中を続けて活動できた本校肢体不自由学級3年男子の実践の一部を紹介する。

Ⅰ 国語科の成果物をタブレットで作成

教科書学習をもとにした成果物を、タブレット導入後から積極的にタブレットで作成を行った。

① 「想ぞうを広げて物語を書こう」での活動

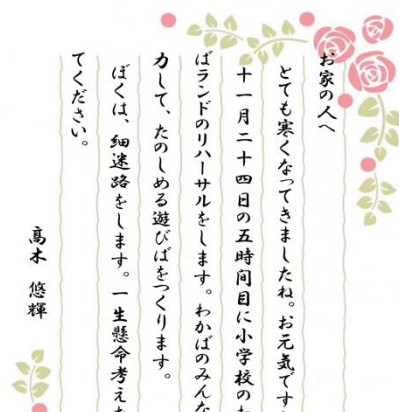
この単位では教師が作成した物語の例を見せてから学習活動に入る単元計画を立てていたが、最初に教師例を見せた時は「えーこんなに書くのー」と否定的であった。しかし、物語をタブレットで作る、ということを知ると、目を輝かせて単元計画と一緒に考え始め、学習に取り組んだ。元々1学期中にローマ字学習を行なっていく中でローマ字打ちの活動を行っていたことも大きかったと考える。



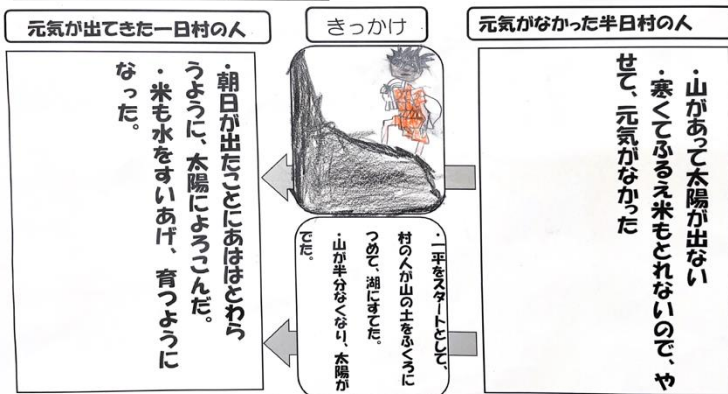
② 「案内の手紙を書こう」での活動

手紙を書く際、整った字を書くことが苦手であり、それが要因となって書く意欲が湧かないということがあったため、手紙をタブレットを使って作成した。

様々なフォントで、文字列が揃ったきれいな文章が書けるということでも意欲を持って活動に取り組んでいた。文字だけだと手紙がさびしくなる、ということから自分でネットを使って手紙のテンプレートを見つけ、それを使って手紙を彩ることもできた。



半日村の人の変化！



みなさん、ゲームは好きですか。ぼくが好きな時間は、ゲームをしている時間です。なぜかというと、いつでもどこでもいろいろな人とできるからです。

「ポケットモンスター」をすると、世界中の人とポケモンこうかんやたいせんができる場所がおもしろいです。

「スマブラ」や「マリオカート」は、世界の人とたたかって勝つのがおもしろいです。

ぼくにとって、ゲームをする時間は、とてもわくわくして楽しい時間です。土日がよくゲームをする日なので、土日が楽しみです。

II 算数科での、授業中のプリント学習をタブレットドリルへの置き換え

その日の学習内容が終わった後に練習問題として行なっていたプリント学習を、タブレットドリル東京書籍に置き換えた。

6 成果と今後の課題

① 国語科

様々な成果物をタブレットを使って作成する中で、元々長い文章を書くことが苦手な児童だったが、回数を重ねるごとに書ける文章の長さが伸びていった。有効と感じたのが、タブレットは文章の書き直しや書き加えが容易であるため、修正に抵抗感が薄いことである。書くことに課題がある児童でも、文章をより上手に書こうと努力しやすかったことが、文章の長さや表現がより良くなっていった一つの要因と考える。課題としては、筆記用具を使って書く経験が少なくなるため、その分の指導が必要なことである。成果物については鉛筆やペン等の筆記用具を用いて作成し、自分の思考を深めるためにより書き直しが必要になる思考ツールの部分の方にはタブレットを活用する方が効果的だと感じた。

② 算数科

書くことにしんどさを感じていた児童にとっては、タッチして回答していくタブレットドリルは考えることに集中でき、とてもよかった。また、修正がしやすいことも意欲につながった。しかし、タブレット自体のスペックやタッチペンとの相性から、自分が書きたい数字や言葉とは異なるものが記入されたり、途中でタブレットドリル自体がフリーズしたりするなど、安定した活用にはまだまだ課題が残されていると考える。また、最もしんどさを感じていたかけ算の筆算では、プリントよりも回答方法が難しいこともあり、かえって逆効果であったこともあった。

小学校における児童の情報活用能力育成を目指す授業づくり ～一人一台タブレット端末(iPad)を効果的に活用した協働学習～

近江八幡市立武佐小学校 教諭 西 一馬

一人一台タブレット端末を活用した授業づくりを協働学習に焦点を当てて実践した。また、校内 ICT 推進委員会を立ち上げ、研修や実践を通して学校全体の教員の ICT 活用能力向上を図り、児童の情報活用能力を育成する授業づくりに取り組んだ。

I 主題設定の理由

文部科学省「GIGA スクール構想」に基づき、本市でも、児童への一人一台タブレット端末が整備された。このような背景から、児童の情報活用能力の育成にむけ、児童への一人一台タブレット端末(iPad)を効果的に活用した授業モデルの構築が必要である。

また、児童の情報活用能力を育成するためには、ICT の活用に長けた限られた教員だけが指導するのではなく、学校全体の教員が、ICT を適切に活用する学習活動を充実させる必要がある。

このようなことから、児童への一人一台タブレット端末(iPad)を効果的に活用した授業モデルを構築し実践することが、児童の情報活用能力の育成とともに、学校全体の教員の ICT を活用する能力の育成につながると考え、本主題を設定した。

II 研究の目標

小学校における児童の情報活用能力の育成につながる授業モデルを構築し実践することにより、児童の情報活用能力の育成とともに、学校全体の教員の ICT を活用する能力の育成を目指す。

III 研究の仮説

小学校における児童の情報活用能力の育成につながる授業モデルを構築し実践することにより、学校全体の教員の ICT を活用する能力が育成されれば、児童の情報活用能力の育成につながるであろう。

IV 研究の方法

1 授業モデルの構築

ICT 活用の学習場面の三つの分類「一斉学習」「個別学習」「協働学習」の中で、特に「協働学習」に焦点をあて授業を行い、その成果物や児童の様子から、情報活用能力が育成できたかを評価する。

2 教員の ICT 活用能力の向上

校内に ICT 推進委員会を立ち上げ、学校全体の教員の ICT 活用能力向上を図る。

V 研究の内容

1 協働学習の実践事例

(1) 第3学年 社会科 単元名「わたしたちの住んでいるところ」(1学期)

この単元では、校区探検で歩いたり、話を聞いたりして自分たちが住んでいる校区の様子や建物について学習をする。学んだことを紹介するために、iPadにある「iMovie」のアプリケーションを使って協働制作による動画の作成に取り組んだ。校区を4つの方面に分けて学習し、班ごとに紹介動画を作成した。1班は4人で編成されているので、それぞれが1方面の動画を作成し、編集して1つの校区紹介動画にした。各自が自分で聞き取ったり、自ら調べたりした情報だけでなく友だちから聞いた情報なども取り入れて作成することができた。また、動画に必要な素材の作成は手書きの資料を撮影した写真を使ったり、プログラミングのアプリケーションを用いたりして作り、動画内に取り入れた。



図1 作成した動画の一部（蛇砂川の紹介）



図2 作成した動画の一部（国道8号線の紹介）

(2) 第3学年 総合的な学習の時間 単元名「校区で働く人々」(2学期)

この単元では、校区で働いておられる方々にお話を聞いて、仕事の内容や仕事への思いを学習する。1学期に行った動画作りと同様に校区で働く方々の紹介動画を協働制作で作成した。しかし、2学期は1学期の実践で明らかになった課題に対する授業を行ったうえで、動画の作成に取り組んだ。課題は以下の2つだった。

①著作権についての課題

1学期に作成した動画内に使用していた画像やイラスト、資料などに他者が作った物が使われていた。インターネットで検索して出てきた画像やイラストをダウンロードしてそのまま使ったり、画面をスクリーンショットして使ったりしていたので、著作権に関する授業を行い、使用可能な画像やイラストとそうでない物の違いを指導した。また、写真など本人の許可を得ないと動画上では使うことができないことも指導した。

②情報収集能力についての課題

自分が知りたい情報を検索する際にインターネットを用いて検索することが多かったが、思った通りの答えまでたどり着ける児童が少なかった。そこで、インターネットで検索する際にどのように言葉を入力すれば効果的であるのかを指導した。これまでは検索で文字を入力する際に言葉と言葉の間にスペースを空けずに検索する児童が多かった。スペースを空けることで検索結果が変わったり、知りたい情報に近づきやすくなったりすることを学習することができた。また、検索して出てきた情報を一番上のウェブページしか見ない児童が多く、より正確な情報を得るために1つだけの情報ではなく複数の情報を見比べて選んだり、確かめたりすることを指導した。



図3 作成した動画の一部(近江牛、コスモスに携わる仕事の紹介)

(3) 係活動「係の紹介ポスターを作ろう」

これまでは、1枚の画用紙を子どもたちが囲んで話し合いながらポスター作りをしてきたが、コロナ禍で緊急事態宣言下の中の2学期だったので、子どもたちが毎学期楽しみにしている係活動の紹介ポスター作りができない状況にあった。そこで、Google社が提供しているGoogle jamboardを用いてポスターを協働制作した。Google jamboardではiPadの画面上にある紙に共同作業で文字を書き込んだり、画像やイラストを取り込んだりすることができる。通信環境が整っている教室等の場所であれば自分の席に座っていても画用紙を囲んでいるかのようにポスター作りができるので離れていても協働制作ができた。また、文字の入力や画像の添削などが容易にできたり、役割が決まれば作業も同時にできたりするので、どのようなポスターにしたいかを友だちと協働で意見整理をする姿も見られた。

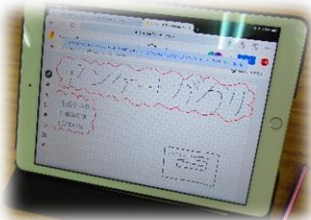


図4 作成途中のポスター



図5 担当の作業の様子



図6 必要な情報を検索の様子

2 校内 ICT 推進委員会での取組

(1) 情報活用能力の体系化

これまで児童に身に付けさせたい情報活用能力が校内では明文化されておらず、各学年でどのような力をつけさせたらよいかが分からないままだった。そこで、1年生から6年生を低学年、中学年、高学年に分類し、「基本的な操作等」「問題解決・探求における情報活用」「プログラミング」「情報モラル」の項目で身に付けさせたい能力を定め明文化した。

近江八幡市立武佐小学校 情報活用能力 学習目標一覧表

	学習内容	低学年	中学年	高学年
基本的な操作等	PC操作	PCの起動や終了、写真撮影の操作ができる。	写真撮影の操作、動画の記録ができる。	目的に応じて写真や映像、音声の加工や編集ができる。
	文字入力	カナ文字で入力ができる。	キーボードなどによる文字の入力ができる。(ローマ字入力)	キーボードなどによる文字の入力が正確にできる。(ローマ字入力)
	ファイル	電子ファイルの呼び出しや保存ができる。	電子ファイルの検索ができる。	電子ファイルの管理ができる。
	ウェブ検索	画像の検索ができる。	キーワードで検索できる。	サイトの構造を理解して情報を見つけられる。
問題解決・探求における情報活用	取捨選択	課題解決に役立つ情報を選ぶことができる。	課題解決に役立つ情報を自分で探して選ぶことができる。	選んだ根拠を説明することができる。
	読み取り	情報の大体をとらえることができる。	情報の特徴、傾向、変化をとらえることができる。	複数の観点から情報の傾向と変化をとらえることができる。
	表現の工夫	情報を組み合わせて表現できる。	自他の情報を組み合わせて表現できる。	複数の表現手段を組み合わせて表現できる。
	プレゼンテーション	画像を使って、相手に伝わるように話すことができる。	相手や目的意識を持ち、画像の順序を考えて話すことができる。	聞き手とのやりとりをききながら効果的なプレゼンテーションを行うことができる。
	学習計画	決められた計画に見通しを持つことができる。	計画に見通しを持つことができる。	自分で計画を立てることができる。
	評価と改善	学びを振り返りよかったところを見つけることができる。	学びを振り返り、改善点を見つけることができる。	情報及び情報技術の活用を振り返り、その効果や改善点を見つけることができる。
プログラミング	プログラミング	規則性を見つけたたり、作ったりすることができる。	プログラミングソフトに慣れ親しむことができる。	プログラミングソフトを使って、意図的にプログラミングすることができる。
情報モラル	情報社会の倫理	約束や決まりを守る。人の作ったものを大切にすることを。	相手への影響を考えて行動する。自分の情報や他人の情報を大切にする。	個人や社会への影響を考えて行動する。情報にも、自他の権利があることを知り、尊重する。
	法の理解と遵守		情報の発信や情報をやりとりする場合のルールやマナーを知り、守る。	何がルール・マナーに反する行為かを知り、絶対に行わない。「ルールや決まりを守る」ということの社会的意味を知り、尊重する。契約行為の意味を知り、勝手な判断で行わない。
	安全への知恵	大人と一緒に使い、危険に近づかない。不適切な情報に出会わない環境で利用する。知らない人に連絡先を教えない。決められた利用の時間や約束を守る。	危険に出会ったときは、大人に意見を求め、適切に対応する。不適切な情報に出会ったときは、大人に意見を求め、適切に対応する。情報には誤ったものもあることに気づく。個人の情報は、他人にもらさない。健康のために利用時間を決める。	予測される危険の内容がわかり、避ける。不適切な情報であるものを認識し、対応できる。情報の正確さを判断する方法を知る。自他の個人情報や、第三者にもらさない。健康を害するような行動を自制する。人の安全を脅かす行為を行わない。
	情報セキュリティ		認証の重要性を理解し、正しく利用できる。	不正使用や不正アクセスされないように利用できる。情報の破壊や流出を守る方法を知る。
	公共的なネットワーク社会の構築		協力し合ってネットワークを使う。	ネットワークは共用のものであるという意識を持って使う。

図7 近江八幡市立武佐小学校 情報活用能力 学習目標一覧表

(2) 職員研修

夏季休業中に職員を対象にした ICT 研修を実施した。研修内容は、機器の使用方法、授業支援ソフト（ミライシード・オクリンク）の使用方法、ICT を効果的に活用した授業の計画で行った。ICT 支援員さんにも研修に参加していただき、実際にオクリンクを使用した授業例を具体的に使用していただき、ICT の活用場面を見いだせる研修となった。計画した授業は2学期に実施をしてもらった。



図8 職員研修の様子

VI 研究の考察（結果）および今後の課題

継続した取り組みによって以下の成果が得られた。

1 児童の情報活用能力の向上

校内 ICT 推進委員会で身に付けさせたい情報活用能力を体系化したことにより児童にどんな能力が身について、どんな能力が足りないかが明確になった。そのため足りない能力を育成するための授業や活動に取り組むことができ、児童の情報活用能力を向上させることができた。

1 つ目は「問題解決・探求における情報活用」の項目の「学習内容の表現の工夫」の部分が向上したと実感した。中学年の学習目標は「自他の情報を組み合わせて表現できる。」となっているが、1 学期に作成した動画の内容は自分が見たり、聞いたりした情報をまとめたものが多く、どの児童も似たような動画内容になっていた。しかし、2 学期に作成した動画では、自分が聞いたことだけでなく、友だちに聞いて教えてもらった内容や自分でもう一度調べ直した内容がたくさん取り入れられており、同じ紹介の動画でも多様な視点で動画の作成をすることができるようになった。

2 つ目は同じ項目の「学習計画」の部分が向上した実感した。中学年の学習目標は「計画に見通しを持つことができる。」となっている。1 学期は動画の作成に時間がかかった。プレゼンテーション作りが初めてということと機器の操作に不慣れなことも考え、教師が準備した見本をもとに作成を進めたが、動画に必要な素材の作成に時間がかかったり、ナレーションの録音と動画とが合わなかったりして完成までに時間がかかってしまった。しかし、2 学期の動画の作成では、1 学期の経験をもとに紹介したい内容を順序立てて動画にし、ナレーションの録音の長さも考えながら動画を作成する児童の姿が大変多くみられた。児童たちも 1 学期より紹介したいことが伝わる動画にしようと様々な工夫を凝らした。作成に時間はかかったものの全体的にはスムーズに作ることができ、計画的に動画の作成を進められるようになった。この成果は同じ項目の「評価と改善」の「学びを振り返り、改善点を見つけることができる。」（中学年）の学習目標についても継続して取り組んだことが繋がっていると考えられる。1 学期に作成した動画についてよかったところと改善点を互いに見つけ合い、2 学期の動画の作成に生かしたことが情報活用能力の育成に繋がったと考えられる。

2 教員の情報活用能力

年度当初や夏季休業中に ICT 機器の簡単な操作の研修や授業に直結する研修など、ICT 校内研修を実施してきたことにより、ICT 機器へ不安を感じる教員が減ってきたように感じる。併せて、ICT 支援員の方が機器の操作や授業内での活用場面など、一緒になって考えてくださったことも ICT がより身近に感じられるようになった要因の 1 つだと考えられる。その結果、授業で ICT を活用する教員やその回数が増え、委員会活動や学校行事など授業以外の多様な場面での活用も頻繁に見られるようになってきた。

また、校内 ICT 推進委員会を立ち上げる際、各学年部に必ず 1 名の推進委員を置くことによって、教員間で ICT に関する質問や相談を気軽にしやすい環境になったことも教員の情報活用能力の向上につながったと考えられる。

3 今後の課題としては以下の点があげられる。

(1) 情報モラル教育

著作権に関する授業は取組の1つとして行ったが、情報モラルの学習内容は中学年だけでも他にもある。例えば、多量にある情報の中から正しい情報を選ぶことができるようになること、危険に出合ったときに大人に意見を求め、適切に対応したりできるようになること、また、Google アカウントやミライシードのオクリンクのアカウントなど校内だけでも複数の ID やパスワードを取り扱っていることから、認証の重要性を理解し、正しく利用できるようになることが挙げられる。これらの学習内容に関する授業を一時的にではなく6年間を通して継続して行っていくための計画が必要である。

(2) 校内で体系化した情報活用能力の見直し

校内 ICT 推進委員会を立ち上げた初年度になるため、体系化した情報活用能力の学習目標一覧表について対象の学年を見直したり、項目を追加や削除、改編をしたりしてその都度見直していかなければならない。また、武佐小学校の子どもたちの実態に応じた内容にもしていく必要がある。

(3) 教員全体の ICT 活用能力のさらなる向上

体系化した学習目標一覧表にを作成することにより、どの教員でも児童の ICT 活用能力の向上を進めていくことが少し容易になった。しかし、日々変化する ICT 機器やそれらに関わる ICT 環境に対応していくためにも教員の ICT 活用能力の向上は進めていかなければならない。そのためには校内に立ち上げた ICT 推進委員会を中心として研修を行っていき、教員全体のさらなる ICT 活用能力向上を図っていききたい。

今回の研究や実践で得られた成果及び課題を生かしながら、児童や教員の情報活用能力が向上できる授業を作っていけるように ICT を効果的に活用していきたい。

Ⅶ 引用・参考文献

文部科学省「学びのイノベーション事業実践報告書（平成26年）」

令和3年度 栗東市小学校教育研究会 視聴覚部会活動報告

(1) 市町名 栗東市

(2) 研究テーマ(研究主題)

Chromebookをはじめとした多様なメディア環境（マルチメディア）を通して、生きる力と豊かな感性をもつ子どもの育成をめざした ICT 教育のあり方を追求しよう

(3) 研究組織

部会長	井上 忠之	大宝小学校
	森村 卓也	栗東西中学校
運営委員	奥田 智紀	治田小学校
推進委員・研究報告	片岡 佑介	治田東小学校

(4) 年間研究計画

5月 月上旬	第1回視聴覚部会	新年度組織の決定と研究主題及び研修計画の立案
7月 27日	県視聴覚部会運営委員・研究推進委員合同研修会	
1月 中旬	第2回視聴覚部会	研究主題にかかわる各校の実践交流
2月 3日	県視聴覚部会運営委員・研究推進委員合同研修会	

(5) 取り組み（実践事例）

栗東市立治田東小学校 4年 体育科 指導案

1. 単元名 跳び箱「目指せ！パーフェクト“くの字”」
2. ねらい 技のポイントを見つけ、課題に応じた練習の場を選択することができる。
3. 本時の展開

学習活動	指導上の留意点	評価規準
1. アニマルタイム ・うさぎジャンプ ・かえるの足打ち ・前転チャレンジ	・大きな台上前転に繋がることを意識させながら運動するように言葉をかける。 ・跳び箱の基礎・基本になる動き、感覚を身につける。	
2. ピタピョンタイム ・ステージへのジャンプ ・セーフティマットに向かって前転	・予備運動の勢いのままサーキット形式で行う。 ・前の児童が OK サインを出してから次の児童が運動を実施する。 ・頭・腰・膝のどこを意識すればよいのかできていることや、足りない部分を児童に合わせて声掛けを行う。	
3. 学習課題の確認	・前回までを振り返り、本時に何を意識するのか考えさせ、めあてをたてる。前回までの自分のメモを見ながら振り返る。(ジャムボード)	◎課題の解決の仕方を知り、課題に応じた練習の場を選ぶことができる。 (思考・判断・表現)

4. レベルアップタイム	- 必ずペアで動くようにし、技の実施者、撮影者に分かれて練習に取り組んでいく。撮影後に動画を確認し、ジャムボードにまとめていく。 - 動画は必ず自分のクロームブックで撮影をする。 - 撮影場所をあらかじめ決めておく。 「くの字」レベルカードで自分がどこまでできているのか確認する。	◎「くの字」で回転することができる。 (知識・技能) ◎観察して課題克服のために意識することをまとめている。 (思考・判断・表現)
5. 振り返り	グーグルフォームに振り返りを記入する。	

4. まとめと今後の課題

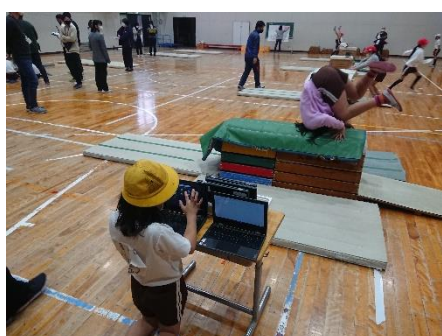
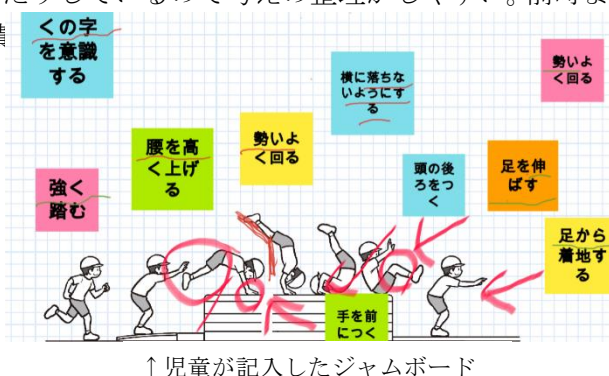
今回体育科で ICT 機器を活用した理由は、課題の把握に効果的であると考えたからである。体育科に対して苦手意識を持つ児童は、自分でできていること、できていないことを把握できていないことが多い。そのため教師や友達からアドバイスをもらっても自分の動きに生かすことが難しい。

そこで、クロームブックのカメラ機能を使って撮影することで児童に自分の姿を客観的に見せようと授業を行った。実際にやってみると、自分の姿を見られるだけでなく、何度も見返すことができるのが児童の課題把握に大きく影響することが分かった。ペアで動画を何度も見返したり、停止させたりしながら見ることで自然とアドバイスし合う姿が見られた。アドバイスの内容も「膝をもっとへしたほうがいいよ。」「頭の着き方を、、、」など具体的なものが多くなっていた。このことから ICT 機器の活用が効果的であったと考えている。

そして、今回は見つけた課題を整理するためにジャムボードというホワイトボードアプリを使用した。ジャムボードは画像を自由な位置に貼り付けることができ、文字をタイピングだけでなく指で書き込むこともできる。そのため、タイピングが苦手な児童でも簡単に扱うことができる。また文字の色を変えることができたり、付箋機能もついたりしているので考えの整理がしやすい。前時までの書き込みも残っているので、今までの学習の積み上げができていた。

この単元では、振り返りをグーグルフォームで行った。これを使うことで、書く作業に抵抗のある児童も前向きに作業を行うことができていた。

この授業を終えて体育科と ICT 機器は組み合わせやすいように感じた。これをきっかけに他の授業でも活用していきたい。しかし、ICT 機器を授業に取り入れるためには、機器の扱い方、アプリの使い方、約束事など児童に指導しなければいけないことが多くなる。そのための時間確保に困難さを感じる場面があった。また、提出物をクロームブック内で行うことで管理はしやすくなったが、アプリによっては提出した物が児童の手元に残らないものもある。ICT 機器内の学習の記録等をどのように児童に還元するのか考える必要があると感じた。



視聴覚研究部会 研究報告書 犬上郡

1. 郡市名 犬上郡

2. 研究テーマ（研究主題）

『子どもの学びを支える視聴覚機器の有効な活用について』

3. 研究組織

犬上郡視聴覚主任会

支部長	上松 仁（豊郷小）	小杉 直樹（多賀中）
理事	寺村 崇司（甲良西小）	佐藤 曜始（多賀中）
研究委員	見館健太郎（日栄小）	菅森 祐幾（甲良中）
部員	城市 泰勢（豊郷小） 児玉 昂平（多賀小） 大矢 浩（大滝小） 堀口 滉太（甲良東小）	久保 太二（豊日中）

4. 年間の研究（事業）報告

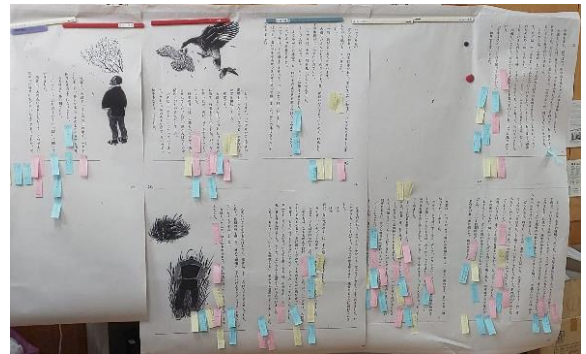
月 日	事業名	会場・開催地
4月30日	犬上郡小中教研視聴覚主任会	大滝小学校
2月 3日	滋賀県小中教研支部長・運営委員 ・研究推進委員・合同研修会→中止	東近江市立能登川東小学校

5. 取り組み（実践事例）

I 本文のポイントが一目で分かる掲示物

5年国語科「大造じいさんとガン」では、登場人物の心情の移り変わりを読み取る際にそれぞれの児童が感じた本文の場所を周りの友だちに知らせるために、本文の全てが見通せる大きな掲示物を用意し、そこに児童が付箋を貼っていった。

デジタル教科書や黒板で押さえていく方法もあるが、この方法の方が自分がそして友だちがどこに注目して読み取りをしているのかがすぐ分かり、有効な方法だった。



II タブレット端末のカメラ機能を使った理科の自然観察活動

今年度より導入された児童のタブレット端末の活用方法の一つとして取り入れている。カメラ機能を使うことでタブレット内に簡単に保存できるため、その後の交流活動やふり返りにも活用できるので大変重宝している。交流活動では、オクリンクを使って児童一人ひとりの考えをグループや全体で共有することができる。今後もタブレット端末の有効な使い方や情報モラルを高める取組を研究していく必要がある。



令和3年度 高島市教育研究会 視聴覚部会研究報告

(1) 郡市名 高島市

(2) 研究テーマ 「児童の主体的な学びにつながる視聴覚機器の活用」

(3) 研究組織 高島市小中学校教育研究会 視聴覚部会(小学校)

部会役職	所 属	職 名	氏 名
部会長	マキノ東小学校	校長	藤田 善弘
副部会長	マキノ南小学校	教頭	川原林 正宏
運営委員	新旭南小学校	教諭	井上 颯
研究推進委員	今津東小学校	教諭	立岡 尚磨
部 員	マキノ東小学校	教諭	竹谷 千秋
	新旭南小学校	教諭	沢尾 晃太
	青柳小学校	教諭	大橋 亮
	本庄小学校	教諭	鈴木 翔
	高島小学校	教諭	濱口 未来
	高島小学校	教諭	城戸 久貴
	高島小学校	教諭	湊田 弘人
	高島小学校	教諭	前川 隼人

(4) 年間研究(事業)報告

5月6日 研究組織の確認、テーマ、計画の検討及び決定

6月4日 高島市小学校教育研究会 視聴覚部会研修会

「児童の主体的な学びにつながる視聴覚機器の活用」

・子どもが輝く!ICT活用(タブレット活用)

～“すぐにでも” “どの教科でも” “誰でも”

生かせる1人1台端末の活用シーン～

滋賀県総合教育センター 情報教育係

高橋 利彰 研修指導主事

西塚 洋 研修指導主事

・実践交流、情報交換

(5) 取り組み

5月6日に開催した第1回研究部会では、今年度の研究組織や年間計画の確認、研究テーマの検討を行った。

6月4日には、第2回研究部会となる、高島市小学校教育研究会視聴覚部会を開催した。研修前半は、「子どもが輝く!ICT活用(タブレット活用)」をテーマに、滋賀県総合教育センター情報教育係の高井橋利彰研修指導主事と西塚洋研修指導主事からICT活用についての話や実践事例などについて講演・演習をしていただいた。日本の学習におけるICT活用は世界の国々と比較すると劣っている現状や学習指導要領改訂でも「情報活用能力の育成」が様々な場面で求められていることについてのお話を聞き、各教科における一人一台タブレットの活用や学習場面に合わせた活用例を紹介していただいた。また、「ロイロノート・スクール」という学習支援アプリの活用事例では、カードの色の違いで気持ちを表現したり、シンキングツールを使うことで、考えを整理したりすることができる。研修に参加した部員は、今後自分がどのような場面で実践できるかを考えながら操作していた。

研修後半は、各校の取り組みや他の研修で学んだ実践例についての情報交換を行った。

(6) 成果と課題

研修会では、実際にタブレット端末を操作しながら研修することで、活用方法などをより具体的にイメージすることができた。日々の授業でICT機器を活用する場面は、1時間の授業の中の一部であることが多いが、ICT活用が児童の理解や発表のために役立つツールであることは間違いない。

昨年度から、一人一台タブレットの環境が実現した。また指導者用タブレットも一人一台や大型テレビなどのICT環境が充実した。そのため、これまで以上にICTを積極的に活用することができる場面は格段に増えた。ICT機器の操作に慣れ、様々な場面で活用できるようにするために、まずは触ってみる、使ってみることが大切であると考え。子どもたちの学びを深めたり、思考の補助をしたりするための一つの方法として、ICTを積極的に活用していきたい。

教師もICT活用のレパートリーには、個人差がある。多くの教師がよりよくICT機器を活用できるように、視聴覚部員が中心となり、研修で学んだ内容や実践したICT活用方法等を各校の職員に推進していくことが課題である。今後もこうした研修会を定期的に行い、授業でのより効果的な活用方法について研究を進めていきたい。

令和3年度 守山市教育研究会 視聴覚部会 研究報告書

(1) 都市名 守山市

(2) 研究テーマ 教育メディアが拓く、豊かな感性、そして確かな学びと生きる力へ
～一人1台端末 Chromebook を活用した ICT 教育の推進～

(3) 研究組織

支 部 長	守山市立小津小学校校長	筈井 千英
副支部長	守山市立守山南中学校教頭	田邊 政治
事 務 局	守山市立小津小学校校	福原 亮太
研究委員	守山市立立入が丘小学校	宇野 史哲
	守山市立明富中学校	中川 浩輔

各校視聴覚主任

校 名	主任名	校 名	主任名
守山小学校	岩岡 伸和	守山中学校	松岡 大作
物部小学校	泉 幸佑	守山南中学校	宮崎 亮平
吉身小学校	和田 輝	守山北中学校	小倉 智
立入が丘小学校	宇野 史哲	明富中学校	中川 浩輔
小津小学校	福原 亮太		
玉津小学校	川村 中		
河西小学校	大門 正幸		
速野小学校	藪内 悠史		
中洲小学校	岸本 和旭		

(4) 年間の研究（事業）報告

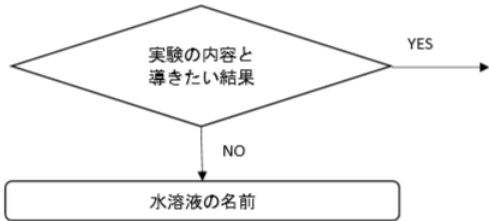
- 4月12日（月） 第1回守山市小中教育研究部会視聴覚(情報)部会
・年度当初の研究会として、令和3年度の研究テーマの決定及び年間計画、組織および輪番の確認を行う。
- 10月21日（木） 小学校部会主催 研究授業公開および授業研究会（小中合同）
・物部小学校にて（近畿大会への参加の呼びかけ）
- 11月25日（木） 近畿放送(学校視聴覚)教育研究大会滋賀大会 WEB 開催 動画視聴参加
- 11月30日（火） 中学校部会主催 研究授業公開および授業研究会（小中合同）
・明富中学校にて（一人1台端末 Chromebook の活用について小中の情報交換）

(5) 取り組み＜実践事例＞

令和2年度 守山市立守山小学校6年生 理科の実践から

- ・単元名 水溶液の性質
- ・本時の目標

水溶液の性質やはたらきの違いをもとに、水を特定する実験計画を立てることができる。

時間	学習活動	教師の支援と留意点
	・水溶液の性質について復習をする。	○「すららドリル」(端末利用のA Iドリル)を使って小テストをさせ、復習をさせる。 ★タブレット
	6つの液体(水、塩酸、炭酸水、食塩水、重曹水、アンモニア水)から水を特定しよう。	
	・フローチャートを用いながら水を特定するための実験の計画を立てる。	○フローチャートは2つの記号を使って組み立てさせ、わかりやすくする。  <pre> graph TD A{実験の内容と導きたい結果} -- YES --> B[] A -- NO --> C[水溶液の名前] style B fill:none,stroke:none </pre> ○今日の授業では、計画がしっかり立てて次の時間、実験からスタートできるように見通しを立てさせる。 ○最初個人で考えて、班でまとめるときには、クロムブックを使って、フローチャートをパソコンで書かせる。 ★Chromebook ☆フローチャート ◎一般化
	・実験を考えるときのポイントを知り、意識して実験を考える。 実験を考えるとのポイント ①安全 ②簡単 ③正確	
	・班ごとに交流をする。 ・実験を考えるときのポイントを中心に発表させる。 ・実験の計画を考え、完成させる。 ・実験をするときに困っていることがないか確認する。	"○班ごとに実験計画を発表し、自分の班の計画と比べて、どのような違いがあるか考える。 ★Chromebook ◎評価" ○水溶液に金属を入れる実験と火を使う実験は同じ机ではできないので、注意することを考えさせる。

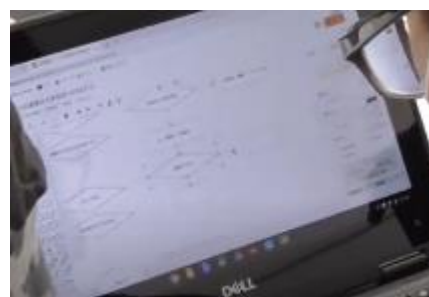
	・今日の授業の振り返りをする。	○Chromebook を使って振り返りをする。
--	-----------------	--------------------------

（６）考察

本授業は、新学習指導要領に示された内容に基づき、理科でフローチャートを扱った授業を行った。児童は、慣れた様子でタブレットを操作し、フローチャートを用いながら水を特定するための実験の計画を立てていた。１人１台 Chromebook を使用していたため、Chromebook に触れる機会が多く持っていたこと、教師の説明が丁寧であったことも関係しているだろう。



授業後の研究会では、児童の試行錯誤する姿についても触れ、「作業に慣れる試行錯誤」と「実験の計画を立てる試行錯誤」のどちらに重点を置くべきかについても意見が交わされた。結果、本時の授



業においては、理科の目標に照らし合わせ、「実験の計画を立てる試行錯誤」に重点をおくべきであると話し合った。このように、活動の重点を明確にした授業づくりを進めていく必要があるのではないだろうか。

（７）成果と今後の課題

守山市では、プログラミング教育の導入や積極的な ICT の活用に取り組んできた。特に令和２年度には、市内の小中学生に一人一台端末 Chromebook が配備され、児童にとって ICT 機器は見慣れた物となってきた。しかしながら、教員が授業で ICT 機器を活用する技能については、まだまだ個人差が大きく、今後の課題ではないかと考えられる。また、児童に関しても端末の操作方法や情報モラルなど、教員が指導しなければならない点は多く、教員の指導力の向上が必要である。

今後は、各学校の情報主任等と連携を取りながら、市教委開催の「守山学ぶ力向上 ICT 利活用検討会議」等で学んだ ICT の活用技術を、研修や授業研究会等の機会を利用し情報共有を進めていきたい。また、プログラミング教育を行う上で、「教科のねらいからはずれないこと」「ICT 機器を使うだけで終わらせないこと」「試行錯誤を繰り返すこと」などの要点を、いかに市内や学校全体で共有し、実践に繋げていけるのか考えていきたい。

次年度は、各学年においてプログラミング教育の研究とさらなる Chromebook の活用とに力を入れて取り組む予定である。